

共通論題

20日 マーキュリー・ホール多目的ルーム7階 (B)

テーマ：中国社会とメディア・コミュニケーション

報告：

◆羅崗（華東師範大学）「インターネット空間と現代中国社会の転型——中国における「人力検索」（インターネット・マン・ハント）とネット民意の要求」

通訳：石井剛（東京大学）

◆岩間一弘（千葉商科大学）「20世紀上海の観光都市化と日本人観光客のシノワズリ」

◆田嶋淳子（法政大学）「グローバル化の中の中国系エスニック・メディア：ローカル・ナショナル・トランスナショナルからの視点」

討論：松浦恆雄（大阪市立大学）・阿古智子（早稲田大学） 司会：坂元ひろ子（一橋大学）

▶趣旨説明◀

坂元ひろ子

1990年代後半以降の中国はグローバル化のなかで飛躍的な経済成長をとげてきた。それは2008年の四川大地震後の北京オリンピック、2010年の上海万博開催で国内外にとりわけ強く印象づけられることになった。文革を経た改革・開放政策への方向転換から20年あまりで世界第二位の経済大国に踊り出るまでになるとは、まず予想しえなかつただけに、驚嘆の度合いも大きい。北京オリンピック開会式での『論語』や李白の詩などの中国古典をも引用した華麗な演出に、中国国民の多くが感慨と誇り、自信を覚えたことであろう。グローバル化時代にあつてのナショナルな記憶が新たに創られた瞬間であつたともいえよう。

この時代のグローバル化は、経済の進展のスピードが驚異的である分、それだけ巨大な不均衡・格差という歪みを社会にもたらしてきているのも確かである。それは日本が経験した高度成長下での歪みを思い返せば想像にかたくない。実際、富裕層の大量出現、国有企業（ことに小規模の）でレイオフされた労働者の貧困化とともに、農民人口がなお全人口の半ばを占めるなかでの「三農問題」を浮上させ、格差問題は深刻である。

だが、グローバル化時代の発展は経済ばかりでなく、インターネットという新たなテクノロジーの発展、普及をとまなうものであつた。この新技術が社会に与えた影響もかつては考えられない程度にまで及ぶようになり、歴史性を帯びる社会もそれによって変容してきている。

とはいえ、インターネットの社会への影響は両義的であることはすでに知られるところとなっている。デマ・誤情報の即時大量伝達やそれによる暴力的な集中攻撃、また国家の動員によるばかりでなく、草の根からの狭隘なナショナリズムの鼓舞にもつながりうる。東日本大震災時に原発事故が起こるや、中国各地で瞬く間に多くの人が無意味な塩の買い占めに駆り立てられたことは記憶に新しい。日中関係の例ではより深刻なものがある。「中国モデル」を標榜して文字通りの大国化を謳歌する中国の存在によって、敗戦後の困難から経済復興を果たした日本の対中優越感は脅かされつつある。歴史認識問題も未決着ななか、国際的地位低落に焦燥する日本ではなにかにつけ嫌中感情を噴出させ、勢いを増す中国では、同様に反日感情を募らせる。嫌中・反日感情の双方とも、間違いなくインターネットを媒介として相互増長、激化している。

その反面、中国においては前近代から多見された相互扶助組織の再発掘という側面からも、ことに四

川の大地震以来、官製ではないボランティア組織の活躍も目立ち始めている。党による統制の強いメディア界にせよ、開放性や多様性の方向性を多少なりとも見せ始めた。そうしたなかで、政治家や官僚、あるいは資本家の不正行為・腐敗の摘発活動、開発のための立ち退き賠償をめぐる民衆の異議申し立てなどにも各種メディアは活用されている。そこに、商業主義や権力による変質の危険性に常にさらされながらも、ある種の民主的な公共空間が構想される可能性も指摘されている。

公共性——それには各種の社会的な格差是正だけでなく、中国でも言い出され始めた「生態文明」をも含むであろう——の追求が世界の課題であるとして、未実現であるだけに想像力を鍛えることが求められる。学術界に即して考えるなら、現代・当代に即した社会科学だけではなく、少なくとも初期グローバル化としての近代の問題を射程にいった歴史学や、富の再配分を含む公正さ、ある種の倫理をも模索する思想哲学や文化の領域にわたる、広義の人文学の活性化もが必要となる。というのも、今年度の京都賞受賞者、ガヤトリ・スピヴァク氏も指摘するように（「人文学における学問的アクティヴィズム」『スピヴァク、日本で語る』みすず書房、2009）、世界の不均衡な発展という現実に対して、グローバル化推進論者は「ゆくゆくは均一になるという偽りの約束」をふりまいて、新技術による推進加速化を求める。それにのっかるネオリベリズムの効率主義は、語学などの知的インフラに時間をかけ、固有の教育テンポを必要とする人文学を認めない。まさにそうした風潮が席卷するなか、とりわけ日本では目先の効率・利益を求めて危険性を隠蔽する「安全神話」にすぎり、昨年の大震災時の原発事故に対して事前事後とも無策で、それこそグローバルな放射能汚染の危機をもたらした。この日本の体験こそグローバルな課題に結びつく。

以上のような考えから、本年の共通論題では「中国社会とメディア・コミュニケーション」をテーマとし、現代中国に即したネット空間と社会変容について、文化社会学的なアプローチから基調となる報告をしていただく。ついで、上海に典型的な観光都市化過程にみる、日中メディアによる双方の「まなざし」の働きについての歴史学的観点からの報告、さらには日本との関係にとどまらない、中国系移住者の国境を越えるローカルなエスニック・メディアへの国際社会学的な観点からの報告をしていただく。文学から国際関係論に及ぶ多角的な視座からのコメントを得て、有意義な討論へと開いていきたい。

報告1：羅崗（華東師範大学）「網絡空間与当代中国社会的轉型——中国式「人肉搜索」与網絡民意訴求」
 （罗岗：网络空间与当代中国社会的转型——中国式“人肉搜索”与网络民意诉求）

网络空间的发展在显示出强大的市场整合力量的同时，是否还有产生新的政治和文化效果的可能？乐观论者提出了“电子共和国”（Republic.com）的乌托邦构想；悲观论者则指出在市场化的网络空间中，知识和信息的商品化将进一步导致文化的商品化，文化和思想等公共领域逐渐被商品化所侵蚀甚至封杀。本文并不直接介入到这一辩论之中，而是指出网络以其“新技术”和“新经济”的双重威力改写了90年代中期以后中国社会的面貌。作为一种新型的媒体，它为文化生产提供了新的公共空间。而且伴随着这种新空间的浮现以及它日益深刻的介入到传统媒体和社会之中，则必然会产生出新型的媒体社群。当然，我们也不能高估这一新的媒体空间的可能性，因为它的生产同样受制于市场与权力交互运作的特殊语境。而且由于网络媒体自身形态的变化——如从公共论坛（BBS）到博客（BLOG）再到微博以及智能手机的广泛使用——都越来越清楚地显示出“新技术”和“新经济”因素的介入对20世纪90年代以来中国文化的生产方式有着显著的影响。需要进一步检讨的是，“技术”与“资本”和“权力”诸因素的交构如何造就了一种新的文化和思想的表达形式，同时这种形式又怎样不可避免地受制于它的生产条件；而新的“文化”和“思想”形态又是如何借助这一

新的媒体空間，在何種程度上可能突破它的限制，而不被資本和權力的邏輯所宰制。本文試圖以“我爸是李剛”這一中國式“人肉搜索”與反腐敗的關聯為中心案例，來討論網絡空間與社會轉型的相关問題。

日本語訳（石井剛・東京大学）

報告1：羅崗（華東師範大学）「インターネット空間と現代中国社会の転型——中国における「人力検索」（インターネット・マン・ハント）とネット民意の要求」

インターネット空間の発展は、市場による統合の力がかくも強いのだということを示していると言えるだろうが、そこから新しい政治的・文化的影響が生まれてくることはあり得るだろうか。この問いに対し、「電子共和国（Republic.com）」などと呼ばれるユートピアニズムを打ち出す楽観論者もいれば、市場化されたネット空間では、知や情報の商品化によって、さらなる文化の商品化が進み、文化的・思想的公共領域はしだいに商品化の侵蝕にさらされ、ひいては封殺されてしまうのではないかと指摘する悲観論者もいる。本報告は、そうした論争に直接介入しようとするものではなく、「新しい技術」や「新しい経済」という二重の力を兼ね備えたインターネットによって、1990年代半ば以降の中国社会のすがたがどのように変わったのかについて論じる。インターネットは新しいメディアとして、新たな文化生産の公的空間をもたらした。それだけではない。新しく登場したこの公的空間は、日増しに伝統的メディアや伝統的社会の内部に深く入り込んでいくことによって、必然的に、新しいメディア・コミュニティが創出されることになる。もちろん、この新たなメディア空間の可能性を買いかぶってもいけないだろう。これは市場と権力の相互作用にコントロールされることによって生まれる特殊なコンテクストだからだ。また、インターネット・メディア自体もその形を変えていく（例えば、掲示板からブログ、さらにはミニブログ、スマートフォンの普及といった具合に）。1990年代以降の中国における文化の産出に対して、「新しい技術」や「新しい経済」の諸要素がいかに大きな影響を与えているのかは、このような変化によってますます明確に示されるのである。より深く考察されるべきなのは、「技術」が「資本」や「権力」などの諸要素と結びつくことによって、新たな文化や思想がどのように表象されるようになったのかということであり、そうした表象が、その産出条件にどのようにして不可避的にコントロールされているのかということである。またさらには、新しい「文化」や「思想」がいかにしてこの新しいメディア空間によってかたちづくられ、資本や権力の論理に支配されることなく、どこまでその限界を突破する可能性があるのかということである。本報告は、中国における「人力検索」と腐敗摘発との関連を示す「父は李剛だ」事件を主なケースとして、インターネット空間と社会転型をめぐる問題について論ずる。

報告2：岩間一弘（千葉商科大学）「20世紀上海の観光都市化と日本人観光客のシノワズリ」

本報告は、とくに日本人観光客のまなざしの変化に注目しながら、20世紀における上海の観光都市化の過程を明らかにする。日本と中国で公開された上海観光に関する新聞・雑誌記事やガイド・旅行記などを比較し、日中の観光客や観光メディアが中華圏都市をどのように「魔術化」（非日常的で特別な場所に変えること）していたのかを検討していく。

近代の日中メディアの上海観光に対するまなざしには相異があった。すなわち、中国メディアはしばしば、外国人の目を意識しつつナショナリズムを基調として、近代合理主義的な「脱魔術化」の観点から上海の観光都市としての後進性を批判していた。それに対して、日本人向けのメディアは、東京・ニ

ニューヨークやその繁華街などとのアナロジーを用いながら、上海に日本の面影と作り物の西洋を見いだすだけでなく、さらにしばしば遊興男性の視点からスリルとロマンスを演出し、上海を「魔術化」して幻想的な観光都市に変えていくことが多かった。

こうした戦前期の上海に対する日本人の危ういエロチシズムとロマンチシズムともいべきまなざしは、戦後期の香港・台北観光に受け継がれた。しかし、1970年代後半以降にそれは過去のものとなり始め、とくに女性・夫婦・家族の観光客には、「シノワズリ」（西洋化された中国ないしは西洋のフィルターを通して見た中国に対する興味）のまなざしが、中華圏都市の「魔術化」に重要な役割を果たすようになっていった。

一方、人民共和国初期の上海は、社会主義のイデオロギーや革命の理想によって「魔術化」され、ゲストとホストが周到に管理・監視されるテーマパークのようになったが、それはあくまでも外国人訪問客に向けられた一部の場所だけのことだった。改革・開放の始まった上海でも対外偏重の観光都市化が継続され、日本の観光メディアが示すノスタルジアと結びついたシノワズリのまなざしはそれを促していた。そしてしだいに上海の中国的なものが意識・利用され始めたのと同時に、西洋的近代も積極的に再生されるようになり、それに伴って現地の人々と外国人観光客のまなざしは近似化し、上海の観光都市化は「ポスト近代」といべき段階に入ってしまったのである。

報告3：田嶋淳子（法政大学）：

「グローバル化の中の中国系エスニック・メディア：ローカル・ナショナル・トランスナショナルからの視点」

本報告の目的はグローバル化の進展とエスニック・メディアとの関係を3つの視点から考えることにある。ここで取り上げる中国系エスニック・メディアは受け入れ社会において中国系移住者が自らの文化的要素を資源に作りあげた新聞、テレビ、インターネットによる情報媒体である。

受け入れ社会というローカルな場において、移住者はエスニック・メディアを介し、身近な生活情報を受け取ると同時に、自らも発信者となりうるオンラインの利用により越境的な情報空間を持ち始めている。送り手も受け手も1990年代は受け入れ社会に限定された形でのみ存在していたが、いまやローカルな情報環境はオンラインを介してグローバルなものへと繋がっている。

ナショナルな領域ではマス・メディアが「想像の共同体」を強化するものとして機能するが、エスニック・メディアは受け入れ社会のみならず、他地域の移住者世界とも結び合う。提供される就職、起業情報などは1国の範囲にとどまらない。労働市場も一部専門職層を中心として世界大で繋がりを始めている。トランスナショナルなレベルで見れば、エスニック・メディアが国境を越えて送り出し社会やその他の受け手へと情報を届けている現状も垣間見える。

1980年代以降、日本における中国系エスニック・コミュニティは70万人の規模に拡大した。エスニック・メディアの対象はこれら70万人であると同時に、送り出しとしての中国社会あるいは他地域の中国系移住者でもある。グローバル化が進展する中で、移住者は国境を越えるトランスナショナルな社会空間に生きる存在であり、移住そのものの意味もかつてとは異なる様相を示す。こうした現状については、「共時性」を念頭に移住者をめぐるメディア環境とその影響をみていく必要がある。本報告では、日本を中心とする現状と、他地域における中国系移住者のエスニック・メディアに関する考察を重ねてみたい。

